



TITLE:

<論文>第一次大戦後アメリカにおける「知能神話」の普及過程:雑誌記事の分析から

AUTHOR(S):

保田, 卓

---

CITATION:

保田, 卓. <論文>第一次大戦後アメリカにおける「知能神話」の普及過程:雑誌記事の分析から. 教育・社会・文化:研究紀要 1999, 6: 1-13

ISSUE DATE:

1999-07-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187216>

RIGHT:

# 第一次大戦後アメリカにおける「知能神話」の普及過程

—— 雑誌記事の分析から ——

保 田 卓

The Popularizing Process of the Myth of “Intelligence” in USA after WWI

—— An Analysis of Periodical Literature ——

Takashi YASUDA

## 1. はじめに

「各人が箱を一つもっていて、その中には、われわれが『カブトムシ』と呼んでいるような何かが入っている、と仮定しよう。何人もそれぞれ他人の箱をのぞきこむことができず、各人とも自分のカブトムシを見ることによってのみ、カブトムシの何たるかがわかるのだ、と言う。——このとき、各人とも自分の箱の中に〔それぞれ〕ちがったものをもっていることが、当然ありえよう。ひとは、そのようなものが絶えず変化している、と想像することさえできよう。——だが、いま、この人たちの『カブトムシ』という語に一つの慣用があったとしたら？ ——そのときは、その慣用は一つのもの表記の慣用ではないだろう。箱の中のそのものは、一般に言語ゲームの一部ではないし、また、ある何かですらない。なぜなら、その箱がからでさえありうるのだから。——いや、箱の中のこのものを通りぬけて〈短絡させる〉ことができるのだ。それが何であろうと、それは消え失せてしまう」(Wittgenstein 訳書 1976、199-200頁、〔 〕内訳者補足、傍点原書イタリック)

人の「頭の良さ」とは、上の「カブトムシ」のようなものだ。誰もそれを直接に見ることはできない。いやそれどころか、そんなものはそもそも存在しないのかも知れない。にも拘らず、われわれは「あの人は頭が良い」などと云う。こうした表現が一旦流通してしまえば、その存在如何が問われることなく、われわれはかかる属性を共有するものとされ、その多寡を当然の如くに云々されてしまう。そしてそのような言説は、様々な思惑から使用されることにより、人の運命を左右する言語行為にもなり得る。

今世紀初頭以来、学校や病院などにおける多少とも診断的な場面において、いわゆる「知

能テスト」が広汎に使用されてきた。その背景には、①生得的に決定された或る種の「頭の良さ」である「知能」という一個の属性が各個人にあり、②それを客観的に測定し得る、という信念が存在し、またこの信念は一般にもかなり流布しているものと思われる<sup>(1)</sup>。しかし、このような信念が必ずしも明らかな根拠をもつものではないということは、この「知能」概念を生みだした当の心理学自身の知見が語っている（例えば、Gardner 1987; Kamin 訳書 1977; Sternberg 1985）。明白な根拠を欠くにも拘わらず信じられている——その意味でかかる信念は一つの「神話」であると言えよう（山下 1980）。では、この「知能神話」はいつ、どこで、いかにして普及したのであろうか。

## 2. 知能テストの誕生と普及<sup>(2)</sup>

今日まで使用されてきたような、「知能」を何らかの数量として表す形の知能テストは、フランスの心理学者ビネー（Binet, A）の作成したテストを嚆矢とするが、その底流として、ピネルに始まり、その弟子のエスキロールらによって継承されていった近代（フランス）精神医学—心理学の流れがあった。実際、ビネーが若い頃所属していたサルペトリエール病院は、ピセートル施設の次にピネルによっていわゆる「解放」が行われた場所である。フーコーによれば、成立期の近代精神医学の「治療」行為は、「狂人」を健常者から「分割」・隔離し、その精神を「客体化」して、彼らを道徳的に処遇するという営為であった。ビネーの知能テストは、ビネー自身の意図にも拘らず、こうした「分割」・「精神の客体化」の文脈に位置づけられる<sup>(3)</sup>。しかし、「知能神話」の出現は、この文脈だけでは説明できない。そもそもビネーの知能テストは、小学校の授業についていけない遅滞児を選抜して特殊学級に收容することのみを目的として作られたものであり、またビネー自身も、知能を、遺伝によって齎される固定的な実体とは見ず、子供の成長の途上で絶えず発達し続ける、多様な能力の複合体として捉えていた<sup>(4)</sup>。

「知能神話」が具体的に形成されたのはアメリカにおいてである。アメリカにおける知能テストの先駆者であり、またビネー・テストの英語版の作成者でもあるゴダード（Goddard, H. H.）やターマン（Terman, L. M.）の知能概念が既にかかるものであったが<sup>(5)</sup>、特にターマンは、「知能指数」（intelligence quotient; IQ）<sup>(6)</sup>の概念をビネー・テストに導入した点で、本稿の問題関心上重要である。なぜなら、その算出手続きの意味合いが忘れ去られ、知能テストがそもそも発達の診断、それもより適切な教育を施すための診断を目的として開発されたのだという認識を欠くと、IQは単に、雑多な問題を解く能力において同年齢者中に占める相対的位置を表す数値に過ぎなくなってしまい、さらに、ビネーのオリジナル版テストの「精神年齢」に比べて、外見上、知能そのものをも生得的に固定されたものとして見せてしまいがちな数値だからである。

ゴダードやターマンのテストは、アメリカの学校などにそれなりの普及を示した。特にターマンのテスト（スタンフォード—ビネー・テスト）は、1920年代を中心に、アメリカで最も広汎に使用されるテストの一つとなった（Chapman 1988）。しかし、知能テストの普及

に与った影響力において、かれらがヤーキズ (Yerkes, R. M.) と共に作成した「アメリカ陸軍知能テスト」は、これらのテストの比ではなかった。このテストは、第一次大戦中、アメリカ陸軍において効果的な人員配置を行う目的で作成・実施されたものであり、最終的に約 175 万人もの兵士のデータが集積された。

陸軍知能テストの内容と実施方法は、大戦中は軍の機密とされたが、戦後になってそれが解除されると、責任者であったヤーキズのもとには、テストに関する問い合わせが殺到した。これに応じてヤーキズらは、1919 年、陸軍テストをもとに「標準型国民知能テスト」(National Intelligence Test; NIT) を作成した。このテストは一年足らずのうちに 50 万部以上の売上が記録し、これを用いて毎年約数百万人の児童をテストした小・中学校や、特殊施設のみならず、企業でも人事管理のために使用されるようになった。また、このテストを入学資格の判定に導入した大学も現われた。戦前は知能テストを受けるといふことには幾分心理的抵抗が伴ったというが、戦後のこうした爆発的な普及によって、知能テストはアメリカ国民にとってかなり身近な存在になったことであろう。

しかし、戦争終結三年後の 1921 年に出版された陸軍知能テストの総括的報告 (Yerkes et al. 1921) は、テストそのもの以上に社会的インパクトをもっていた。そこでは、アメリカの白人成人の平均精神年齢は約 13 歳であるという衝撃的「事実」の他に、北欧・西欧人を頂点とし、南欧・東欧人、黒人の順に低くなるという生得的知能の人種間格差が報告されていた。さらに 1923 年、戦時中は陸軍の心理検査官を務めていたブリガム (Brigham, C. C.) が、この分析をより進めたモノグラフ (Brigham 1923) を発表した。それによると、移民の兵卒はアメリカ在住期間の長短によって精神年齢が異なり、最近の移民ほど知能が低いという結果が見出された。ブリガムはこれを、より生得的知能の低い人種と、人種内でもより生得的知能の低い人々の移住の増加によって説明した。アメリカ白人の平均知能は 13 歳並であるというヤーキズらの報告も、この文脈で説明された。すなわち、アメリカの白人の知能はもとも低かったわけではなく、知能の低い移民の増加によって低下したのである、と。

内容の文化的な偏りや実施条件の不備、それに恣意的な解釈など、陸軍知能テストが孕んでいた多くの問題点を考えると、その結果のこうした説明は、その前提からして怪しいということになる。しかし、テストの妥当性を信じ、その結果の生得論的な解釈を疑わなかったブリガムは、人種による移民の選別・制限を主張した。

移民の制限や選別を唱えたのは、ブリガムが最初というわけではなく、かなり以前から実施さえされていた。既に 1875 年、「(アジアからの) 下級労働者 (coolie) ・ 罪人 ・ 売春婦」の入国が法的に禁止され、1903 年には「癲癩患者 ・ 錯乱 (insane) 者」が、さらに 1907 年には「痴愚 (imbecile) 者 ・ 精神薄弱 (feeble-minded) 者」が、その対象に追加されている。これらは当時のアメリカの優生主義的思潮を反映したものであるが、「安価な労働力が賃金の引き下げにつながると主張した労働組合、外国文化の影響でアメリカ固有の文化が純粋性を失うことを恐れた頑固な移民排斥主義者、この上さらに面倒を見なくてはならない対象者が増えることをいやがったソーシャルワーカー、海外から過激思想を持ち込まれるのを恐れた経営者」(Kevles 訳書、1993、169-170 頁) など、この他にも様々な立場から移民の制限が主張

されていた。心理学者の中でも、1913年に前出のゴダードが、アメリカへの移民の入国審査を行っていたエリス島に検査者を送り込んで100人余りの移民をテストさせ、その半数近くが精神薄弱者であるという“結果”を得て、夙に移民の制限を示唆している。

人種や民族による移民の制限という発想は、19世紀後半以降、産業後発国からの、近代産業の労働力としては質の悪い移民を嫌うという経済的理由から主張されていたが、ブリガムの著書（前出）の出版以来、これに加えて人種差別的な意味合いで唱えられる傾向が強くなった。一方、これと同じく1923年、下院の移民・帰化委員会は、移民を恒久的に制限する法案の審議を開始した。委員会は多くの移民制限論者を召集したが、その証言の中でヤーキズやブリガムによる陸軍テストの分析結果は確定的事実として援用された。人種による移民の制限に反対する議員もいないことはなかったが、当時のアメリカ連邦議会は、上下両院ともに保守的な共和党が多数派であった。こうした状況下で、人種別移民制限を定めたジョンソン・ロッジ法案は、1924年4月、上下両院で圧倒的多数をもって可決され、これにクーリッジ大統領が直ちに署名して発効した。

新しい移民制限法は、1921年成立の旧法と同様、ヨーロッパの各国別に、既に国内に在住している移民の数に比例して新しく入ってくる移民の数を制限するというものだった。ところが、今度はその割合が3%から2%に削減され、さらに、割当の根拠となる各国出身の移民数を1890年の国勢調査から算出した。旧法の3年後に成立した新法が、なぜ旧法より20年も前<sup>(7)</sup>のデータを基にするのか。理由は明白であった。南欧・東欧からの移民が、この年を境に急増していたからである。

陸軍知能テストのデータが1924年の法律の成立にどれほど与って力があったのかは定かではない。移民の制限を要求する様々な勢力の強さを考えれば、それが無くても同じような法律が出来ていたのかも知れない<sup>(8)</sup>。しかし、ヤーキズやブリガムの報告書が、結果的に移民の問題を「政治の舞台」から「うわべは客観的な科学的研究の堅固な基盤」の上に移しかえる（Chorover 1979, p. 69）のを助けたことは否定できまい。

本稿の問題にとってさらに重要なことがある。法案の審議の中で、ある議員が警告した。もしこの法案を通過させたら、下院は南欧・東欧の移民が劣等であるという原則を間接的に打ち立てることになるであろう、と（Marks 1975, p. 326）。事態はこの議員の憂慮したとおりになったが、打ち立てられた「原則」はそれだけではなかった。移民制限論者の議論が陸軍テストに依拠していた以上、そして、そのテストの開発者たるヤーキズやその結果の最も影響力のあった報告者であるブリガムが知能生得論者であり、その知能観が著書やテストの利用に反映していた以上、「知能は生得的かつ測定可能」という観念もまた、知能の人種差の主張の前提として、確定的事実としてアメリカ社会に受け入れられたと思われる。確かに、陸軍テストは移民制限の思潮をつくりあげたわけではなく、寧ろそれに利用されたと見るのが妥当かも知れない。しかし、更なる移民の流入を嫌う諸勢力の要求に引き出される中で、ブリガムらの結論やその背景思想は、人々の意識において自明化されていったと考えられよう<sup>(9)</sup>。

### 3. 第一次大戦前後の雑誌掲載の知能関連記事の分析

さて、第一次大戦後に知能テストが普及したこと、これに陸軍知能テストが大きく関与したこと、さらに、陸軍知能テストの結果が移民制限法案の審議の過程で利用されたこと、これらは前章で依拠した先行研究などで既に確認されている。また、知能テストの普及する素地が予め存在したことも、しばしば指摘されてきた。すなわち、当時、アメリカの学校の生徒数は移民の子弟の流入などによって急速に増加して、学校をより「効率的」に運営する必要が差し迫ったものとなっており、知能テストはトラッキングのための恰好の道具として歓迎されたのであった。さらに言えば、産業経営におけるテイラー主義 (Taylorism) をはじめとして、その「効率」を最優先する進歩主義 (progressivism) 思潮が興隆していたということもあった (Chapman 1988; Cremin 1961; Degler 1991; Katz 訳書 1989)。

しかし、知能テストそのものの普及と、「知能神話」の普及とは区別されねばならない。そして、この時期に「神話」が広く普及したことについては、ときに示唆されてきたとはいえ、経験的にはまだ十分に明らかにされたとは言い難いのである。

「神話」に限って言えば、その普及を齎した要因として、テストそのものの普及の他に、次の二つを挙げることができる。

- ① 人種差別思想 (前章参照)
- ② 優生思想

アメリカに流入したダーウィニズムは、一面で「知能神話」の対極に位置する行動主義 (behaviorism) を生み出す一因となったが、「神話」論者にも、主として優生思想を介して影響を与えた (Degler 1991; Kevles 訳書 1993)。

無論、この両者の間には密接な関係があるので、「神話」普及の要因としても切り離し難いところがある。それゆえ本稿では、①に焦点を絞りたい。そこで、本稿の問題関心にとって重要なのは、移民制限運動に利用された陸軍テストの結果とその解釈、すなわち生得的知能の人種間格差の観念が、逆に、法案の審議に伴う選別的移民制限への関心の高まりや法律の成立といった事態の中で、アメリカ社会にいかにか広く受け入れられたか、という点である。なぜならそこには、「知能神話」すなわち「生得的かつ客観的に測定可能」という知能概念が含意されているからである。本稿では、当時のアメリカで発行されていた雑誌 (主に教育関係) に掲載されている知能 (テスト) 関連記事にあたることにより、極めて不十分ながらこれを検証した。また、陸軍テストや NIT の普及に関しても同じ史料で併せて調べた。

**分析の対象** アメリカの雑誌索引 *Readers' Guide to Periodical Literature*<sup>10)</sup> の分類項目 “Ability tests” “Efficiency, Educational” “Educational measurement” “Intellect” “Intelligence” “Intelligence tests” “Psychological examinations” “Psychology, Educational” “Waste in education” の下に掲載されている記事のうち、知能 (一般的な「心的能力」 (mental ability) 等も含む) を論述の重要な対象としている記事で、年次は 1905-35 年、総数は 705 件である。雑誌名および各誌の記事数と大まかな種別を表 1 に示す。

表1 分析対象雑誌一覧

雑 誌 名	記事件数	種 別
American City	2	都市問題
American Economic Review	1	経済
American Journal of Sociology	12	社会学
American Mercury	2	一般
Annals of the American Academy of Political and Social Science	8	社会科学
Atlantic Monthly	3	一般
Current History	1	一般
Current Opinion	2	一般
Education	34	教育
Educational Review	18	教育
Elementary School Journal	41	教育
Forum	8	一般
Freeman	1	一般
Harper Monthly Magazine	5	一般
Harper Weekly	1	一般
Hygeia	4	保健衛生
Industrial Arts and Vocational Education	3	職業教育
Industrial Arts Magazine	5	職業教育
Industrial Education Magazine	4	職業教育
Industrial Management	7	経営
Journal of Home Economics	1	家政学
Journal of the National Education Association	8	教育
Libraries	1	図書
Library Journal	1	図書
Literary Digest	23	一般
Nation	4	一般
National Conference of Social Work, Proceedings	3	福祉
National Education Association, Proceedings and Addresses	24	教育
Nature	1	科学
New Republic	15	一般
Newsweek	2	一般
North American Review	3	一般
Outlook	6	一般
Popular Science Monthly	4	科学
Publishers' Weekly	1	出版
Quarterly Journal of Economics	1	経済
Review of Reviews, (American)	5	一般
School and Society	322	教育
School Life	3	教育
School Review	38	教育
Science	14	科学
Scientific American	10	科学
Scientific American Monthly	3	科学
Scientific American Supplement	8	科学
Scientific Monthly	18	科学
Scribner Magazine	3	一般
Survey	15	一般
System	1	経営
Wilson Bulletin for Librarians	1	図書
World's Work	4	一般
計	705	

**結果** まず、年次毎の総記事数の推移と、そのうち陸軍テストまたはNITに言及している記事の数の推移を図1に示す。

総記事数は、第一次大戦が終結した1918年を境として大幅に増加しており、殊に大戦後10年間で著しい。さらに、この推移には陸軍テスト・NIT言及記事数が大きく寄与しているのがわかる。実際には、これらの記事は陸軍テストやNITに「言及」しているというより、これらのテストを学校・大学等で用いて調査した記事が多いのであるが、ともあれこの結果からは、第一次大戦後に知能（テスト）に対する関心が昂まったこと、さらに、それには陸軍テストやその改訂版であるNITが大きな影響を与えたことが窺える。

しかし、本稿の問題関心に照らせば、こうした単なる数量分析だけでは何も言えない。なぜなら、いくら数が増えているといっても、各々の記事が「知能神話」に関して、また知能の人種間格差に関していかなる立場に立っているかは、ここからは明らかにならないからである。そこで次に、「知能神話」が普及した時期を特定するため、「神話」すなわち知能の①生得性、②客観的測定可能性を主張する記事の数と割合の推移を調べた結果を表2に示す。この二点のうち①については、知能の生得性それ自体をテーマにした記事は少ないので、全体としてさほど明瞭に識別できるわけではない。そこで、“native intelligence (ability)” などといった明白な表現を用いているものの他は、例えば、知能テストで高得点を示した被検者について“gifted”あるいは“endowed”というように、生得論的含意の強いと思われる

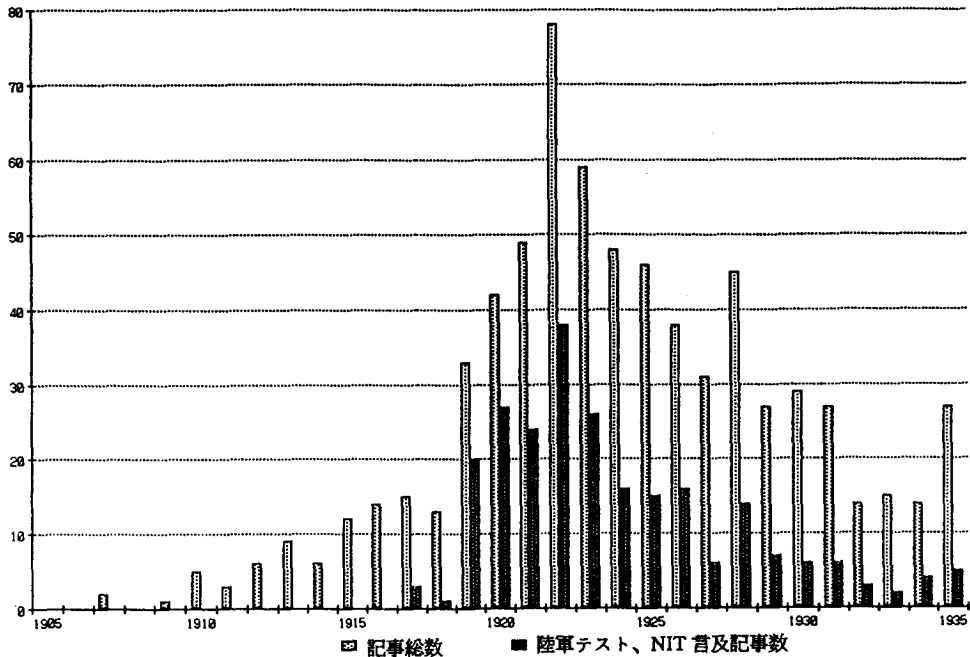


図1 知能関連記事総数および陸軍テスト・NIT言及記事数の推移



表現を用いているもののみをカウントした。したがって、この例で言えば“bright”や“superior”などと表現しているものは数に入っていないので、どちらかと言えば「知能神話」に関して過小評価する方向での集計となっている。また、戦前は記事数が少ないのでまとめて、戦後は原則として4年毎（最後のタームのみ1931-35年の5年間に区切って集計した。

表2 「知能神話」記事の数と割合の推移

年次	「知能神話」記事数 / 記事総数 (割合, %)
1905-18	18 / 86 (20.9)
1919-22	72 / 202 (35.6)
1923-26	57 / 191 (29.8)
1927-30	38 / 132 (28.8)
1931-35	19 / 97 (19.6)

前述のように、知能の先天性（あるいは後天性）に言及している記事自体が多くないので、「知能神話」的な記事の割合も全体的水準として高くはない。しかし、ともあれ表2からは、終戦後の約10年の間で「神話」的な記事の数と割合が明らかに増大しているのが見てとれる。これは、「神話」がこの時期に広く普及したことを示唆している。

では、この「神話」の普及に、人種の要因は実際に関与していたのであろうか。この点を間接的ながら検証するため、知能の人種間格差を扱っている記事を抽出し、この問題に関する立場の大まかな分類を試みた。その結果が表3である。

ここで、「知能の生得的人種差に対する立場」欄の「肯定的」「慎重」「否定的」という分類は、「一般に（あるいは特定の）人種間に知能の生得的格差がある」という見方に対する立場を示すもので、それぞれ例えば次のような記述を基にしている。

「肯定的」: ‘...These data would indicate that the intelligence of the light negro is raised by the presence of white blood just as his skin color is also altered. There can be no environmental influences operative since the light and dark negroes are living in the same surroundings.’

(“What Makes Employees Differ?”, Industrial Management, 1924)

「慎重」: ‘Intelligence as measured by the intelligence test depends very largely on how and where you were brought up. To be sure, the negro does generally fall below the white on these tests, but no one who is familiar with conditions in the south can claim that the negro has as good a chance to be educated as his white neighbor.’

(“Which Races Are Best?”, Scientific American, 1931)

「否定的」: ‘It is evident again that, so far as color may indicate the degree of white or Negro blood, it signifies little or nothing with respect to intellectual ability. Indeed, as one reflects upon the really *known* evidence, the actual facts, it seems high time to throw overboard the whole notion of the *general* superiority or inferiority of any race.’

(“The Comparison of Races”, Scientific Monthly, 1925)

また、「データのみ」の記事は、何らかの知能テストを実施した結果、異人種間で差が認めら

表3 知能の人種間格差関連記事とその立場

年次	論 文 題 目	知能の生得的人種差に対する立場
1907	Mind of woman and the lower races	否定的
1907	Brain weight and intelligence	慎重
1910	Racial differences in mental traits	慎重
1910	The "typical" man who does not exist	慎重
1910	The psychology of peoples	慎重
1910	A test for intelligence	慎重
1910	The mechanism of progress	慎重
1911	Measuring your intelligence: John Gray's new instrument for testing preservation	肯定的
1913	Negro children in the public schools of Philadelphia	否定的
1913	Measuring the intelligence	データのみ
1914	Mind in the white and the negro	慎重
1915	Mind of the negro child	慎重
1915	New way of measuring mental ability	慎重
1917	General intelligence and wages	データのみ*
1917	Testing Immigrants	否定的
1918	Study of mental and physical characteristics of Chinese	データのみ
1918	Diagnostic value of the Yerkes point scale	慎重
1918	Rationale of testing intelligence, with special reference to testing in the army	肯定的
1919	Teachers' estimates of negroes and whites	否定的
1920	Intelligence and its uses	肯定的
1920	Study of race differences in New York city	肯定的
1920	Intelligence of Chinese students	否定的
1921	Female criminal offenders; results of the Army alpha tests	データのみ*
1922	American misgivings	肯定的
1922	Classification of junior high school pupils by the Otis scale	肯定的
1922	Experiment in the classification of first-grade children through the use of mental tests	肯定的
1922	Tests and measurements in rural schools	データのみ*
1922	Great conspiracy; or, The impulse inperious of intelligence testers, psychoanalyzed and exposed by Mr. Lippmann	肯定的
1922	Mental tests for immigrants	肯定的
1922	Sectional differences as shown by academic ratings and army tests	否定的
1922	Notes on racial differences	データのみ*
1922	Adventures in stupidity: a partial analysis of the intellectual inferiority of a college student	肯定的
1922	Intelligence tests of certain immigrant groups	肯定的
1922	Can intelligence be measured?	否定的
1923	Testing the human mind	肯定的
1923	What is intelligence?	慎重
1923	Races and psychological tests	慎重
1923	Measuring tha mentalities in our melting-pot	肯定的
1923	Measuring the achievement and ability of Filipinos	肯定的
1923	Intelligence scores of colored pupils in high schools	データのみ*
1923	Men and half-men	肯定的
1924	What makes employees differ?	肯定的
1924	Comparison of white and negro children in verbal and non-verbal tests	慎重
1924	Intelligence of Mexican children	データのみ
1924	Intelligence of Chinese in Hawaii	否定的
1924	Significance of intelligence tests in the University of Hawaii	否定的
1925	Salvage of the non-Nordic	慎重

1925	Brains and the immigrant	慎重
1925	Psychology, education and sociology	肯定的
1925	Comparative study of the mental capacity of six grade Jewish and Italian children	肯定的
1925	Intelligence of southern negro children	データのみ*
1925	Comparison of races	否定的
1926	Methodology of racial testing ; its significance for sociology	肯定的
1926	Race hypothesis	慎重
1926	Blockhead vs. Nordic ; racial IQs	否定的
1926	Relative intelligence of white and colored children	データのみ*
1926	Mentality of "inferior" races of man	否定的
1926	Race and psychology	肯定的
1927	Group intelligence tests and linguistic disability among Italian children	慎重
1927	Non-language tests in foreign countries	データのみ*
1928	Educational achievements of negro children	否定的
1928	Mental status of the negro	慎重
1928	Methods of investigating comparative abilities in races	慎重
1928	Comparative study of the intelligence of Indians in United States Indian schools and in the public or common schools	肯定的
1928	Intelligence of Mexican school children	データのみ*
1929	Statistics and intelligence	否定的
1929	Intelligence of negro college freshmen	データのみ*
1930	Nature versus nurture	慎重
1930	Intelligence and achievement of southern negro children	データのみ
1931	Which races are best?	慎重
1932	Intelligence quotients of Mexican and non-Mexican siblings	否定的
1935	I. Q. test in a Negro school ; with summary of the study of reading in the colored school of Louisville, Ky. grade 5	データのみ

れたというデータを提示しているだけで、その差が先天的か後天的かの解釈は行っていないものである。ただし、星印（\*）のついた記事は、スタンフォード・ビネー・陸軍テスト・NITのいずれかをを用いたものであるが、これらのテストはそもそも生得的知能の測定というコンセプトのもとに開発されたものであり、そのことが当時広く知られていたことは表3記載以外の多くの記事からも窺われるので、これらの記事も実質的には「肯定的」な記事と見做して大過ない。

記事数が少ないので確たることは言えないが、単純集計では、第一次大戦終結までは実質的に「肯定的」な記事は18件中3件（16.7%）であるのに対して、終戦後は54件中28件（51.9%）と飛躍的に増加している。したがって表3の結果は、第一次大戦終結後、知能テストそのものへの関心の昂まりとともに知能の人種間格差もまた議論の俎上に載せられる機会が増えたこと、さらにそれが生得的に解釈される傾向が強くなったことを、少なくとも傍証するものと言えよう。

この他、記事の著者（肩書など）や掲載誌、それに内容を年を逐いつつ鳥瞰したところをまとめると、次のような次第である。知能テストに限らず、算術やスペリングなどの基礎的能力の標準テストの必要性は、学校生徒数の増大などに伴って第一次大戦前から認識されていた。その中には、（特に1908年のビネー・テストの輸入以来）生得的能力や一般知能（general intelligence）への関心もあった。しかしその認識・関心は、記事を見る限り、ほぼ教育

関係者に限られていた。大戦後の記事数の増大は、さながら、そうした関心の火に、陸軍テストが油を注いだように見える。その後批判もあったが、少なくとも大戦後 10 年程の間は、陸軍テストその他のテストが広汎に使用された。そして、この頃先鋭化していた人種間の違いへの関心がそれを助長した。大戦後においても「知能神話」に否定的な意見は少なからずあった。しかし、「神話」肯定的な記事のみならず、こうした否定的な記事の中にも、この時期における知能テストの爆発的・「熱狂的」(“enthusiastic”) 普及を指摘する記述が数多く見受けられる。さらに、本稿の関心にとってより直接的に関わることだが、否定的記事でさえ、「神話」的知能観が当時支配的であったことを前提としたうえで、それを批判するという構成のものが少なくない<sup>10)</sup>。

#### 4. 結 語

前章の分析結果から、「知能神話」は第一次大戦後の特に 10 年程の時期に流布したこと、また、それには知能の生得的人種差の観念の普及が関与していたことが間接的ながら確認された。しかし、「神話」の普及に人種の要因がどの程度関わっていたかは測りきれない。この点は、第二次大戦から現在までの時期、およびアメリカ以外の国における知能概念の在り方とその変遷の検討と併せて、今後の課題である。

#### 注

- (1) これは、わが国に限っても多かれ少なかれあてはまると思われる。例えば腰越 (1993) は、わが国の学校で知能テストが秘密裡に扱われるのは、「努力主義規範」が支配的なわが国にあって、(真偽はともあれ) 努力が比較的反映しないとされる知能テストが受け入れられ難いゆえであることを示唆している。また、『科学朝日』1994 年 10 月号では『「知能」幻想』と題された特集が組まれ、さらに 1996 年 3 月 18 日付朝日新聞朝刊では、現在使用されているある知能テスト中の不適切な問題に対する批判についての記事がある。「知能」はわれわれ日本人にとっても決して過去の問題ではないのだ。
- (2) 本章は次の文献に負うところが大きい。Chorover (1979), Gould (訳書、1989), Kamin (訳書、1977), Kevles (訳書、1993), Marks (1975), Mensh and Mensh (1991)。
- (3) 「十九世紀における《実証的》心理学のもつ逆説とは、その心理学が消極性の契機を出発点としてのみ成立可能であったという点である。たとえば、人格の二重性の分析をもとにしている人格心理学、健忘症の研究をもとにする記憶心理学、失語症の研究をもとにする言語心理学、精神薄弱の研究をもとにする知能心理学。」(Foucault 訳書 1975, p. 547)
- (4) 「もしわたしたちが、知能を、ただひとつの、不可分な、かつ特殊な性質をもつ機能ではなく、かえって弁別や、観察や、把持など——これらの可塑性と可延性はすでにたしかめられている——の小機能の集合によって成りたつものであるとかがえるならば、この総体にたいしても、それぞれの要素にたいするとおなじ法則が支配し、したがって、人の知能の発達の可能性はきわめて確実なこととわかるだろう」(Binet 訳書 1961, p. 137)
- (5) 例えば、Goddard (1920)、Terman (1916) 参照。
- (6) ビネーのオリジナル版テストの指標である「精神年齢」(被検児の知能発達の度合を表す) を暦年齢で割って 100 を掛けた値。例えば、暦年齢 8 歳の子の精神年齢が、10 歳であれば IQ 125、6 歳であれば IQ 75 である。
- (7) 旧法は 1910 年のデータを使用していた。
- (8) Degler (1991) などはこうした見方をしている。

- (9) Chase (1977) も同様の指摘をしている。
- (10) Haney (1984) においてもこの索引を用いて 1912 年から 1982 年までの雑誌記事が分析されているが、本稿の問題関心からすると不十分であるため、後述するように本稿では対象年次を第一次大戦前後に絞り、かつより精緻化した分析を行った。
- (11) これらの結果は、しかし過大評価されてはならない。知能は生得的か、そしてそれは客観的に測定可能かというテーマに関して、次に挙げるような、今日問題とされる論点の多くは、この時期に既に出されている。
- ① 「知能」という概念それ自体の曖昧さ (“What Is Intelligence?” と題された記事だけで 5 本もある!)
  - ② 発達途上におけるある時点での子供の知能の先天的なものとは後天的なもの、および両者の相互作用
  - ③ 家庭環境をはじめとする社会的環境の影響  
例えば、黒人のテスト結果が白人のそれに比べて低く出たデータを紹介する記事のうち、その差を生得的なものとは見做さないもの多くは、黒人児童の家庭教育環境の劣悪さを指摘している。
  - ④ 初期経験  
子供の知的発達にとって、出生から幼児期のいわゆる初期経験が決定的な役割を果たすことは、今日の発達諸科学では常識となっているようであるが、本稿で扱った記事の中にも夙にそれを指摘しているものがある。
  - ⑤ テスト時の知能以外の心的機能（感情・意志など）の影響（例えば、Downey, J. E., “Rating for Intelligence and for Will-Temperament” *School and Society*, Vol. 12, 1920; Mackaye, D. L., “The Interrelation of Emotion and Intelligence” *AJS*, Vol. 34, 1928 等）
  - ⑥ テスト内容の文化的偏り  
例えば、陸軍テストには次のような多項選択式の問題がある。  
クリスコとは——売薬、消毒薬、練り歯磨き、食料品?  
カフィールの足の数は——2, 4, 6, 8?  
クリスティ・マッシュソンは——有名な作家、芸術家、野球選手、コメディアン?
  - ⑦ テスト作成時のノルム集団の偏り  
知能テストは通常、標準テストとして作成されるから、作成の際には、被検者の母集団を代表し得る見本集団すなわちノルム集団を標本抽出し、その集団に予備的に実施したテストを採点して、その結果に基づいて基準（ノルム）を設定する必要がある。記事の中には、第一次大戦前後に作成された特定の知能テスト（スタンフォードービナー等）作成時のノルム集団の代表性に疑問を呈するものがあった。
  - ⑧ 解答の速さ（一定時間内にどれだけの問題を解けるか）を指標とすることの問題  
知的機能の中には、十分に時間を与えられないと発揮されないものもあるかも知れない。陸軍テストなどの多くの知能テストのように、極めて短時間のうちに正しく解答した問題の数を指標にするタイプのテストでは、こうした機能を測定することができない。

## 文 献

- Binet, Alfred 1911, 波多野完治訳『新しい児童観』明治図書、1961。
- Brigham, Carl C. 1923, *A Study of American Intelligence*, Princeton University Press.
- Chapman, Paul D. 1988, *Schools as Sorters: Lewis M. Terman, Applied Psychology, and the Intelligence Testing Movement, 1890-1930*, New York University Press.
- Chase, Allan 1976, *The Legacy of Malthus: The Social Costs of the New Scientific Racism*, Alfred A. Knopf.
- 『『知能』幻想』1994、『科学朝日』第54巻第10号、12-31頁。
- Chorover, Stephen L. 1979, *From Genesis to Genocide: The Meaning of Human Nature and the Power of Behavior Control*, The MIT Press.
- Cremin, Lawrence A. 1961, *The Transformation of the School: Progressivism in American*

- Education, 1876-1957*, Alfred A. Knopf.
- Degler, Carl N. 1991, *In Search of Human Nature: The Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought*, Oxford University Press.
- Downey, June E. 1920, "Rating for Intelligence and for Will-Temperament", *School and Society*, 12, pp. 292 - 294.
- Estabrooks, G. H. 1931, "Which Races are Best?", *Scientific American*, Vol. 144, pp. 311 - 313.
- Foucault, Michel 1972, 田村 俣訳『狂気の歴史——古典主義時代における——』新潮社、1975。
- Gardner, Howard 1987, "Beyond the IQ: Education and Human Development", *Harvard Educational Review*, Vol. 57, No. 2, pp. 187 - 193.
- Goddard, Henry H. 1920, *Human Efficiency and Levels of Intelligence*, Princeton University Press.
- Gould, Stephen J. 1981, 鈴木善次・森脇靖子訳『人間の測りまちがい——差別の科学史』河出書房新社、1989。
- Gregg, James E. 1925, "The Comparison of Races" *Scientific Monthly*, Vol. 20, pp. 248 - 254.
- Haney, Walt 1984, "Testing Reasoning and Reasoning About Testing", *Review of Educational Research*, Vol. 54, No. 4, pp. 597 - 654.
- Kamin, Leon J. 1974, 岩井勇児訳『IQの科学と政治』黎明書房、1977。
- Katz, Michael B. 1975, 1976, 藤田英典・早川 操・伊藤彰浩訳『階級・官僚制と学校』有信堂、1989。
- Kevles, Daniel J. 1985, 西俣総平訳『優生学の名のもとに「人類改良」の悪夢の百年』朝日新聞社、1993。
- 腰越 滋 1993、「進学適性検査の廃止と日本人の階層組織化の規範—適性か努力か—」『教育社会学研究』第52集、178-207頁。
- Laird, Donald A. 1924, "What Makes Employees Differ?", *Industrial Management*, Vol. 67, No. 3, pp. 184 - 190.
- Mackaye, David L. 1928, "The Interrelation of Emotion and Intelligence", *American Journal of Sociology*, Vol. 34, No. 3, pp. 451 - 464.
- Marks, Russel 1974, "Race and Immigration: The Politics of Intelligence Testing", reprinted in C. J. Karier (ed.) 1975, *Shaping the American Educational State: 1900 to the Present*, The Free Press.
- Mensh, Elaine and Mensh, Harry 1991, *The IQ Mythology*, Southern Illinois University Press.
- Sternberg, Robert J. 1985, *Beyond IQ: A Triarchic Theory of Human Intelligence*, Cambridge University Press.
- Terman, Lewis M. 1916, *The Measurement of Intelligence*, Houghton Mifflin.
- Wittgenstein, Ludwig 1953, 藤本隆志訳『ウィットゲンシュタイン全集 8 哲学探究』1976。
- 山下恒男編著 1980、『知能神話』JICC 出版局。
- Yerkes, Robert M. (ed.) 1921, Psychological Examining in the United States Army, *Memoirs of the National Academy of Sciences*, Vol. 15.